

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34104

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12244

研究課題名（和文）在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標の有用性

研究課題名（英文）The usefulness of an index for self-evaluation of a team approach to improving quality of life in older adult receiving home based care

研究代表者

松井 妙子（MATSUI, Taeko）

鈴鹿医療科学大学・看護学部・教授

研究者番号：50290359

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究対象は、訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所（以下、三事業所）従事者（以下、三職種）である。研究目的は、在宅療養高齢者に対して、この三事業所の三職種が、どのようなチームアプローチを行ったのか、チームアプローチの様相を明らかにし、「在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標」の臨床的妥当性を質的帰納的に検討することである。在宅で終末を迎えた超高齢者（106歳）の看取りとがん（75歳）の二つの事例にかかわった三事業所、三職種にそれぞれグループインタビューを行い、逐語録を作成しデータとした。現在、質的帰納的に分析中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

三事業所、三職種によるチームアプローチは、職種間の相互作用が大きく、役割の解放があり、職種間の階層性がない活動である。このようなチームアプローチの様相を明らかにすることでチームとして高齢者の生活の質向上のためのより良いサービスにつながる指針を得ることができると考える。また、「在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標」の臨床的妥当性を検討することで実践に役立つ指標開発ができる。

さらに、妥当性、信頼性のある指標を開発すれば、三事業所の人的資源開発および所属組織改善のための方策を明らかにする研究へと発展させることができる。

研究成果の概要（英文）：The study participants were home visit nurses, home care service coordinators, and care manager (hereafter, the “three professions”) working in home visit nursing agencies, home visit caregiving agencies, and in-home care support centers (hereafter, the “three agencies”). The objective of the present study was to elucidate the characteristics of the team approach adopted by the three professions at the three agencies for elderly individuals receiving end-of-life in-home care, and to qualitatively and inductively investigate the clinical validity of a “team approach self-evaluation index to improve the quality of life of elderly individuals receiving in-home care”. Two case studies of elderly individuals who received end-of-life care at home were collected. Group interviews of the three professions working in the three agencies that supported the two cases were conducted. The data of the transcript are currently undergoing qualitative inductive analysis.

研究分野：高齢者看護

キーワード：在宅看護 チームアプローチ 訪問看護 訪問介護 介護支援専門員 在宅ケア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

多職種協働チームには、(Multidisciplinary, Interdisciplinary, Trans disciplinary) の3つのモデルがある<sup>1)</sup>と言われていて、国内外において、Multidisciplinary team、Interdisciplinary teamに関する研究<sup>2,3)</sup>は、行われているが、チームメンバーの相互作用が大きく、役割の解放、融合を伴うTrans disciplinary teamに関する研究はほとんど行われていない。

医療提供体制の改革の一つに在宅医療があり、療養高齢者の在宅ケアが推進され、医療・介護の連携が求められている。在宅ケアにおいて、医療・介護連携の要になるのは訪問看護事業所であり、介護保険制度下において、訪問看護と訪問介護との橋渡しを行うのは居宅介護支援事業所の介護支援専門員である。この三事業所従事者によるチームアプローチは、事業所従事者間の相互作用が大きく、たとえば、在宅高齢者の終末期支援では訪問看護が居宅介護支援事業所従事者の役割を代替して医師と連携するなど、役割の解放があり、階層性がない活動である<sup>4)</sup>。

このようなTrans disciplinary teamが、チームとしてより良いサービスを提供していくための方策を探求する研究はほとんど行われていない<sup>5)</sup>。在宅ケアにおけるTrans disciplinary team approach (以下、TAと略す)研究は、実践報告や事例研究が重ねられているが、在宅療養高齢者の生活の質向上のためのチームアプローチ活動指標開発や、チームアプローチが行える人材開発をどのように行うべきか、事業所の管理運営をどのように行えばよいのかに言及した研究は少ない<sup>5)</sup>。諸外国においてもTrans disciplinary teamの考えは存在するが、医療・福祉の分野横断的な研究はほとんど見られない。そこで、在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標 (以下、指標) を作成したので、その臨床的妥当性を質的・帰納的に検討することとした。

### 2. 研究の目的

研究の目的は、訪問看護事業所・訪問介護事業所・居宅介護支援事業所(三事業所)従事者(三職種)を対象とし、「在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標(以下、指標)」の臨床的妥当性を検討することである。

本研究のチームアプローチとは、単一事業所では解決できない支援ニーズの充足を目的に、対象の利益を最優先にしながら、主体的に協力関係を構築し、事業所従事者の役割を解放、融合しながら、目標達成に向けて取り組む相互関係の活動をさす。この指標の臨床的妥当性を検討し、有用性を確認することで、実践に役立つ指標開発ができ、三事業所従事者がチームアプローチの実践水準を自己評価し、実践を向上するための方策を検討できると考える。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究対象者

訪問看護事業所がチームアプローチをうまく行えた(あるいは、行えなかった)と判断した事例に対して、その訪問看護事業所の訪問看護職とともに活動した訪問介護事業所のサービス提供責任者と居宅介護支援事業所の介護支援専門員である。二つの訪問看護事業所に依頼したので対象者数は6人である。

#### (2) 対象事業所

中山間地域の都市部に位置する株式会社の訪問看護事業所と過疎地の公立基幹病院とともに活動する訪問看護事業所である。

#### (3) 観察・測定項目

前もって提出された事例の「支援経過」をもとに、三事業所(三職種)間で連携して「どのような支援を行ったのか」、「三職種の行動とその行動をとった時の判断や考え」、「連携やチームアプローチに関する考え」、「よいチームアプローチ、悪いチームアプローチとはどのようなことか」についてインタビューガイドに沿ってグループインタビューを行った。

#### (4) データの収集方法

三事業所が関わったチームアプローチ事例(匿名性を確保)の「支援経過」、「事例の介護サービス計画表」などを前もって提出してもらい、それを確認しながら、語られたエピソードをもとに、三事業所(三職種)間で連携して「どのような支援を行ったのか」などインタビューガイドに沿って、TAに焦点を当ててグループインタビューを行った。インタビューは、研究対象者の許可を得て録音し、それをデータとして収集した。

職種によるインタビュー内容の偏りを最小限にするために、インタビューは社会学の研究者とともに行った。また、インタビューは、対象者の発言と研究者の解釈との間に認識の異なりを生じないように、発言内容を要約する、言い換えるなど対話的に行った。

#### (5) 分析の方法

収集した録音記録から逐語録を作成し、それをデータとした。1次分析では、言語的・非言語的表現について、在宅療養高齢者の生活の質を向上するためにどのような考えで、どのように行動しているのかをTAのコンピテンシーに焦点を当てて質的帰納的に分析する予定である。次に、事例の支援経過に沿ってチームがどのように変化したのか、チームの形を捉えていく予定である。

#### (6) 倫理的配慮

研究対象者の所属、氏名の個人情報、符号対応表を作成した。対象者の個人情報は、グルー

インタビュー時に年齢、職種、専門職資格、専門職としての経験年数と専門職キャリアの内容などを、研究対象者に語ってもらったが、氏名は番号で呼び合うなど、個人が特定できないように録音した。上記の措置により、本研究で研究対象者から取得した個人情報は匿名化され、どの研究対象者の情報であるか直ちに判別できないように加工または管理されている。

#### 4. 研究成果

チームアプローチがうまくいったと訪問看護事業所が認識している二つの事例のデータを得た。チームアプローチがうまくいかなかったと認識している事例のデータは収集できなかった。収集した二つの事例のうち、一つの事例は独居で超高齢の看取りであった。もう1事例は老老介護中の妻が乳がんとなり、入退院を複数回繰り返しながら病院で最後を迎えた事例であった。この看取りは、介護支援専門員と夫の入所施設の計らいにより、妻が入院している病院に寝たきりの夫が面会する中で夫に見守られて最後を迎えた事例であった。

グループインタビューに応じた三職種の基礎属性を表1に、事例の概要を表2に記載している。グループインタビューに参加した三職種は、年齢、経験から熟練者であった。二つの事例にそれぞれかかわった三職種を対象としたグループインタビューから逐語録を作成した。今後、それらをデータとしてメンバーの関係性、チームの力動などに焦点を当てて質的帰納的に分析していく予定である。また、終末期の経過の変化に合わせてどのような支援チームを組んだのか、チームのかたちの変化についても分析していく予定である。

表1 グループインタビュー対象者の基礎属性

| 事例  | インタビュー日時<br>インタビュー時間 | 事業所     | 職種                 | 年齢 | 性別 | 背景                           | 資格 |
|-----|----------------------|---------|--------------------|----|----|------------------------------|----|
| 事例A | 2018年7月27日<br>94分    | 訪問看護事業所 | 看護師                | 60 | 女  | 准看護師約6年                      |    |
|     |                      | 居宅介護事業所 | 介護支援専門員            | 63 | 女  | 介護福祉士7年、介護支援専門員13年           |    |
|     |                      | 訪問介護事業所 | 介護福祉士<br>サービス提供責任者 | 50 | 女  | 在宅ヘルパー18年、介護福祉士13年           |    |
| 事例B | 2019年12月20日<br>89分   | 訪問看護事業所 | 看護師 管理者            | 54 | 女  | 看護師30年以上、介護支援専門員資格有<br>管理者4年 |    |
|     |                      | 居宅介護事業所 | 介護支援専門員            | 66 | 女  | 看護師経験(40年以上)、訪問看護師経験(25年)    |    |
|     |                      | 訪問介護事業所 | 介護福祉士<br>サービス提供責任者 | 64 | 女  | 介護福祉士(16年)、介護支援専門員資格有        |    |

表2 事例の概要

|                    | 事例A  | 事例B  |
|--------------------|--|--|
| 地域特性               | 中山間地域にある地方都市   | 中山間地域に位置する公立基幹病院を中心として保健医療福祉介護サービスが展開されている。地域包括ケアの先進地  |
| 事業所特性              | 株式会社立の訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所と通所介護が併設され、三事業所は仕切りのないワンフロアに設置されている。                                    | 退院時に情報提供が必要と判断されれば、病院保健師から地域の保健師へ退院情報が提供される仕組みがある。保健師の配置が1人/人口1000。  |
| 疾患                 | 老衰(106歳)   | 乳がん末期(75歳)   |
| 死亡時期               | 2017年5月死亡  | 2017年11月死亡   |
| インタビュー時期           | 2018年7月  | 2019年12月   |
| 要介護度               | 5  | 1  |
| 事例の特徴              | 96歳のときから約10年間生活支援の訪問介護サービスを受けていた。2014年12月から介護保険の訪問看護が開始。本人が自宅で最後まで過ごし、亡くなることを希望。独居高齢者の自宅での看取り事例。 | 夫の長年の介護に介護サービスが入っていた。乳がんが見つかり右乳房切除後訪問看護サービスを利用(2017年6月～)、放射線療法とホルモン療法を行うが、がんが進行し、症状コントロールを行いながら、入退院を繰り返し、緩和ケア病院で死亡。施設入所中の夫が面会する中で死亡。 |
| 家族状況               | 先妻の子供はいるが、後妻であり、血縁者はすでに死亡。   | 長男と同居であるが、日中独居。次男は離れて居を構えている。  |
| 介護保険のサービス利用        | 訪問介護、訪問看護、居宅介護支援、福祉用具貸与  | 訪問診療、訪問介護、福祉用具貸与、居宅療養管理指導(歯科・薬剤師)、居宅介護支援   |
| 医療保険のサービス利用        | 訪問看護1回/週<br>在宅クリニック 毎日   | 医療訪問看護、病院リハビリ  |
| 私費・インフォーマルサービス利用状況 | なし   | 自費ヘルパー、ボランティア(不安の傾聴)   |

#### 引用文献

- 1) 菊地和則：多職種チーム3つのモデル チーム研究のための基本的概念整理、社会福祉学、59(2) 273-290、1999。
- 2) 杉本知子：長期ケアにおける「Interdisciplinary team」概念分析、老年看護学、11(1)、5-11、2006。
- 3) 杉本知子他：高齢者ケア施設における学際的チームアプローチ実践評価尺度の開発 信頼性・妥当性の検討、日本看護科学学会誌 31(4)、14-23、2011。
- 4) 松井妙子他：訪問看護、訪問介護、居宅介護支援事業所従事者が、在宅高齢者終末期支援を行う上で経験する葛藤とその対処、香川大学看護学雑誌、17(1)、11-24、2013。
- 5) 加瀬裕子：チームアプローチの歴史と定義、在宅ケアとチームアプローチ、日本在宅ケア学会編、3-11、2015。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>松井 妙子、綾部 貴子、沖 亞沙美                              | 4. 巻<br>23          |
| 2. 論文標題<br>訪問看護・訪問介護・居宅介護支援事業所従事者のチーム活動に関連する要因           | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>香川大学看護学雑誌                                      | 6. 最初と最後の頁<br>23～32 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>doi.org/10.34390/njku.23.1_23 | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                    | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>松井妙子、綾部貴子、沖亞沙美、依田春菜、畑吉節未 |
| 2. 発表標題<br>訪問看護師の連携の自己評価の実際         |
| 3. 学会等名<br>第23回日本在宅ケア学術集会           |
| 4. 発表年<br>2018年                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>松井妙子、綾部貴子、畑吉節未                           |
| 2. 発表標題<br>居宅介護支援事業所に従事する介護支援専門員の職業的アイデンティティの単純集計結果 |
| 3. 学会等名<br>日本ケアマネジメント学会第17回研究大会in北海道                |
| 4. 発表年<br>2018年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>綾部貴子、松井妙子、畑吉節未                       |
| 2. 発表標題<br>居宅介護支援事業所で従事する介護支援専門員の職業的アイデンティティの構造 |
| 3. 学会等名<br>日本ケアマネジメント学会第17回研究大会in北海道            |
| 4. 発表年<br>2018年                                 |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>綾部貴子、松井妙子                                 |
| 2. 発表標題<br>ケアマネジャーの職業的アイデンティティとトランスディシプリナリーアプローチとの関連 |
| 3. 学会等名<br>第60回日本老年社会科学会                             |
| 4. 発表年<br>2018年                                      |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>松井妙子、綾部貴子、他                           |
| 2. 発表標題<br>訪問看護・訪問介護・居宅介護支援事業所従事者の職業的アイデンティティの構造 |
| 3. 学会等名<br>第22回日本在宅ケア学会学術集会                      |
| 4. 発表年<br>2017年                                  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>綾部貴子、松井妙子、他                              |
| 2. 発表標題<br>居宅介護支援・訪問看護・訪問介護のトランスディシプリナリーアプローチに関する研究 |
| 3. 学会等名<br>第22回日本在宅ケア学会学術集会                         |
| 4. 発表年<br>2017年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>松井妙子、沖亞沙美、他                                      |
| 2. 発表標題<br>訪問看護師の訪問介護職と介護支援専門員とのチームアプローチ実践指標の再テスト法による信頼性の検討 |
| 3. 学会等名<br>第37回日本看護科学学会学術集会                                 |
| 4. 発表年<br>2017年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>綾部貴子、原田由美子、松井妙子  |
| 2. 発表標題<br>介護支援専門員による医療や介護とのトランスディシプリナリーアプローチの関連要因:介護支援専門員のとりまく仕事の環境に焦点をあてて |
| 3. 学会等名<br>第59回日本老年社会科学会  |
| 4. 発表年<br>2017年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>綾部貴子、原田由美子、畑吉節未、松井妙子                      |
| 2. 発表標題<br>介護支援専門員によるトランスディシプリナリーアプローチ展開上の仕事の環境の現状分析 |
| 3. 学会等名<br>第16回日本ケアマネジメント学会                          |
| 4. 発表年<br>2017年                                      |

|                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>沖亞沙美、松井妙子              |
| 2. 発表標題<br>チーム活動経験と職業的アイデンティティの関連 |
| 3. 学会等名<br>第37回日本看護科学学会学術集会       |
| 4. 発表年<br>2017年                   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Taeko Matsui, Asami Oki Takako Ayabe  |
| 2. 発表標題<br>Status of Medical and Care Team Approach in Long-Term CareInsurance system in Japan-part2: The Structure of the Transdisciplinary Approaches Practiced by the home-Visit Nurses |
| 3. 学会等名<br>OPTIMIZING HEALTHCARE QUALITY: TEAMWORK IN EDUCATION, RESEARCH, AND PRACTICE (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2016年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>松井妙子、綾部貴子、他                          |
| 2. 発表標題<br>訪問看護・訪問介護・居宅介護支援事業所従事者の他職種との連携に関する考え |
| 3. 学会等名<br>日本在宅ケア学会                             |
| 4. 発表年<br>2016年                                 |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>松井妙子、綾部貴子、他   |
| 2. 発表標題<br>訪問看護・訪問介護・居宅介護支援のトランスディシプリナリーチームアプローチの調査から 属性および事業所特性の結果の分析 |
| 3. 学会等名<br>日本老年社会科学会   |
| 4. 発表年<br>2016年  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                     | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                   | 備考           |
|-------|---|---|--------------|
| 研究分担者 | 綾部 貴子<br><br>(ayabe takako)<br><br>(90331727) | 梅花女子大学・公私立大学の部局等・准教授<br><br><br>(34424) |              |
| 研究分担者 | 沖 亞沙美<br><br>(oki asami)<br><br>(70774024)    | 香川大学・医学部・助教<br><br><br>(16201)          | 2019年6月30日辞退 |